

# 読書ノートの作り方

## ——初学者が基本文献を読む場合——

仮想大学 井上浩一

読書ノートはどのように作ればよいのでしょうか。教科書『私もできる西洋史研究』（和泉書院）の63ページには次のようにあります。

読書ノートの作り方は初年次セミナーで学びました。あの時に紹介したレーニン『哲学ノート』を思い出して下さい。抜粋・要約・コメント・整理といったキーワードでした。

「レーニンって誰ですか?」「レーニンに学ぶなんて、教授は、今さら何を考えてるのやろ」いろいろ疑問や感想があると思います。でも西洋史を研究していてレーニンを知らないのは問題ですね。何百年と続いてきたロシアの帝政を打倒した革命家です。

読書ノートの取り方はひとりではありません。予備知識の量や記憶力、どんな種類の本なのか、その本から何を学びたいのかが、ひとりひとり違うからです。たとえば私がビザンツ史の専門書を読む場合、予備知識はかなりあります。なにしろ何十年とビザンツ史をやっているのですから。しかし歳がせいか、記憶力は減退の一途をたどっています。「確か、誰かそんなこと書いていた、どの本の、どこだったのか」と本棚を探し回ることもしばしばです。

そういうわけで、私が専門書や論文を読む場合は、基本的なことをいちいちノートしません。これは知らなかった、こんな解釈もあるのか、といった注目すべき情報のみ抜き書きします。通説とは異なる著者独自の見解に注目し、データベースソフトを使って情報を1件1件整理するのです。パソコンならキーワードで検索できますので、記憶力を補うことができます。もちろん、すばやく検索ができるような、必要な時には元の本に当たれるようなノートの取り方をしなければなりません。また、読みながら考えたこと、思いついたことなども、自分の論文のヒントになりますから、忘れずに記入します。のちほど具体例を見てみましょう。

逆に、記憶力はともかく、予備知識がまだまだという人——皆さんの多くはそうですね——は、情報やデータを個別にピックアップするのではなく、本全体を読みこなし、基本的なことをしっかり身につける必要があります。また、この本は自分の研究の基本だという重要文献を読む場合も、きちんとノートをとる必要があります。ここではそのような場合の読み方、ノートの取り方を説明します。

ここで行なうのは授業でもやった通読ですが、基本文献ですから、繰り返し読みます。1回目はノ

一トなしで鉛筆だけもって読んでゆきます。読みながら、ここは重要だ、理解できたというところに傍線を引いたり、線で囲みます。また、理解した内容を短い言葉で欄外に書きこみます。見出しのようなものです。ここはわからないというところに波線を施します。？マークを打っても構いません。読みながら思ったこと、気づいたことも簡単に書きます。もちろん、図書館の本には書き込みができませんから、付箋紙に書いて貼っておきます。何度も読み返したり、書き込みもする基本的な図書は思い切って買しましょう。一生の財産になります。

もう一度読みます。先の書き込みを参考にしながら、ていねいに読み、今度はノートをとってゆきます。レーニンの読書ノートは理想的なノートです。レーニンは長い亡命生活を送っており、いざとなれば本や図書館から離れなければならない可能性がありました。恐らくそのことを念頭においてでしょう、彼のノートは、読めばもとの書物の内容がわかるように、ていねいに書かれています。彼がどのようにノートをとっているのかは、きちんと通読することが必要な基本文献の読み方として大いに参考になります。以下、具体的にみてゆきましょう。

### **(1) 抜書（本の一部をそのまま書き写す）**

ここは重要だと気づいた箇所、著者の言いたいことがまとめられている箇所などは、初学者はその文章をそっくり書き写しましょう。抜書と呼びます。面倒くさい作業ですが、書くことによって内容をより深く理解できるようになります。レーニンも、ヘーゲルの『論理学』から繰り返し抜書をしています。もちろん、引用符「」で括り、元の本の何ページかを書いています。

難しいのはどの範囲まで抜き書きするかということですね。何もかも抜き書きしては、かえってわかりにくいノートになります。やはりレーニンのノートを推薦しておられる佐藤優『読書の技法』（東洋経済）によりますと、最初に読む基本文献の場合でも、読書ノートは原稿用紙50枚以下とっておられます。基本的な重要文献はそこそこ厚さがありますから、1冊で原稿用紙500枚、あるいはそれ以上でしょうか。10分の1以下に圧縮することになります。抜書はもっと少なくとも構いません。というのは、どうしても抜き書きしなければならない箇所以外は、次に述べる要約や箇条書きで充分だからです。（本を残して逃げ出したり、図書館にも行けなくなる可能性があったレーニンはていねいに抜粋していますが、皆さんは、いざとなれば本を見ればよいのです）。

### **(2) 要約・箇条書き**

抜書はとくに重要なところにとどめ、ポイントとなる箇所以外については、どんなことが書かれているのかわかるように、要点をまとめてノートに記しておきましょう。箇条書き風に内容見出しを付けてゆくのです。段落ごとにその段落で著者が述べていることをひとことにまとめます。まとめにくかったら、その段落の中心となっているキーワードを見つけ、それを書いておきます。

内容見出しは、先に挙げた抜書についても行ないます。レーニンも必要に応じて、自分の抜書に見

出しを付けています。ぱっと見てわかるノートということですね。

### (3) コメント

読んだり、ノートしたりしているうちに、感想や疑問、すでに知っている知識との関連などが頭に浮かんでくることがあります。あるいは、そこに書かれていることと直接関係はないが、ふと思いついたことなどもあるでしょう。読書によって頭脳が活性化され、ひらめきが生じるのです。いろいろなことを考えさせる本は、やはり良い本、読む値打ちのある本ですから、しっかりノートをとろうという基本文献の場合、読んでいるうちにいろいろなことが思い浮かぶはずです。読書しながらひらめいたことは、あなたの宝物です。忘れないうちにメモしましょう。自分が考えたこと、思いついたことは、本に書いてあることときちんと区別してノートします。ノートの取り方のポイントです。私は、自分の意見や思いつきは、⊕と記したあとに書いています。あとで具体例を見て下さい。

### (4) 整理

内容をまとめて整理すると、わかりやすいノートになります。自分の勉強、知識の整理のためのメモです。これによって、その本に対する理解が深まります。レーニンも、ノートの途中で独自のまとめを入れています。私たちが読んでも結構ためになる部分です。一例を挙げると、ヘーゲル『論理学』の読書ノートのなかで(全集版157～58ページ)、ヘーゲルの考え方と、弁証法的唯物論の考え方——レーニン自身の立場——を比較しつつ整理しています。ヘーゲルからの抜書と並べて、自分の考えを書いているのです。このような整理やまとめを行なうことで、より理解が深まるでしょう。

それでは最後にノートの実例を見てもらいます。最初は私のカード、ふたつ目は皆さんが基本文献を読む時のノートです。

#### (1) 井上の情報カード

##### 古代末期のエフェソスについて新学説

Liebeschuetz, *The Decline*, pp.32 以下。都市地図あり。

(1) 5世紀にエフェソスの新しい中心市街が形成される。=聖マリア教会、主教座、属州総督の宮殿。

※聖マリア教会も5世紀、遅くても500年頃の建設。⇔通説、エフェソス公会議431年。

(2) ヘラクレスのアーチ(凱旋門?)=5世紀半ば。これは上記の新しい都市中心部への入口。

(3) 新しい都市中心を囲む城壁の建設も5世紀末～6世紀初=Karwiese 説。

⊕城壁は5世紀における都市の再編の結果であって、7世紀の軍事的危機(ペルシャ人・アラブ人)の結果ではないというのが Karwiese=Liebeschuetz 説。⇔フォス説=7世紀=井上論文。

Liebeschuetz, *The Decline and Fall of the Roman City*, Oxford, 2001, pp.32 以下で述べられているビザンツ都市エフェソスの変貌についての見解をカードにメモしました。私がこのような本を読む場合には、断片的な情報を収集しますので、ノートではなく、カード（具体的にはカード型データベース・ソフト）を使うことにしています。

エフェソスの新しい都市城壁については、7世紀にペルシア人続いてアラブ人がこの町に迫って来た時に建設されたと、C. Foss, *Ephesus after Antiquity*, Cambridge, 1979.が考古学調査をもとに述べており、私もフォスさんの説をふまえて、7世紀にエフェソスの町が大きく姿を変えたと論文や本で書きました。ところがリーベシュッツさんは、カルヴィーゼさんの考古学調査をもとに、エフェソスの都市景観の変貌はそれよりももっと早かったと結論しています。大きな問題ですので、さっそくカードをとりました。

見出しを付け、出典を記し、内容を箇条書き風に3点にまとめたあと、フォス説との対比を書き込みました。リーベシュッツさんは、エフェソスは包括的な発掘調査が行なわれた例外的な都市であるとも述べていますが、すでに知っていることなので、カードには記しませんでした。

## (2) 皆さんの読書ノート

今度は皆さんのノートです。第4回十字軍について論文を書こうと思い、まずは、十字軍に関する基本文献ですと、教科書『私也能する西洋史研究』89～90ページに紹介されていた八塚春児『十字軍という聖戦——キリスト教世界の解放のための戦い』(NHKブックス)を読みました。次ページのようなノートになりそうですね。

この本は初心者にも読みやすいように、小見出しが付けられています。自分で要約しなくても著者が要約してくれているので、助かります。小見出しはノートしておきましょう。

以下の読書ノートを見てもらえばわかりますように、抜書・要約・コメント・整理がなされています。抜書きは「」で括り、そのページ数を付記します。(私)と記号を打ったあとに書いているのは、著者の八塚さんが書いていることではなく、皆さんのコメント(感想や疑問)です。また12世紀と13世紀の十字軍の比較表も、整理の一環として作成しました。

表示の都合でかなり詰めて書いていますが、実際は、あとから書き込めるようにもっとあいだを空けて、できればノートの片側のみを使います。ノートを見直して、ここがポイントというところにアンダーラインも入れました。

(2) 読書ノートの例

八塚春児『十字軍という聖戦』（日本放送出版協会、2008年）

## 8、第4回十字軍（155ページ～）

**悪名高い十字軍（156）**——第4回十字軍は評判が悪い、その理由。教科書にも書かれている。

- (1) 純粋な宗教的動機を失った、
- (2) ヴェネツィア商人に動かされて、ヴェネツィアの敵コンスタンティノープルを占領した。

**通説の再検討（157）**——「しかし、こうした教科書的記述は正確ではない」（157）

(1) 宗教的動機

- ・第1回も宗教的な動機以外が大きい。——第1回十字軍のページを見よ
  - ・13世紀は十字軍に熱心で、十字軍が繰り返された。「むしろ13世紀のほうが宗教的義務意識は高まったように思われる」（158）＝第4回にも宗教的動機はあった。（私）十字軍だから当然かも。
  - ・「十字軍家系」の形成
- 「宗教的動機から世俗的利害へ」という図式は、この点でも成り立ちえない（159）

### 12世紀の十字軍と13世紀の十字軍の比較

- 12世紀：あまり熱心ではない。十字軍側が優勢（ただし新たな十字軍の必要はあった）
- 13世紀：繰り返し十字軍が行なわれた。十字軍国家の危機、宗教的義務意識の高まり

(2) **ヴェネツィアの関与（159）**

- ・教科書・概説書「ヴェネツィア商人の要求によりコンスタンティノープルを占領」＝正しくない。
- ・結論「コンスタンティノープル占領は計画的なものではなく、偶然の重なりから、いわば、「やむなき選択」から生じたものであった」（159）

(1) ヴェネツィアでの傭船契約

(2) ビザンツ宮廷のクーデターに巻き込まれた。（私）なぜ巻き込まれたのか？

- ・ヴェネツィアとビザンツは「商敵」の関係ではなかった。

(私) では第4回十字軍はなぜコンスタンティノープルを攻略したのか？？ビザンツのせい？

## インノケンティウス3世の即位（161）

……以下略